

寺 報

真宗大谷派松寺永福寺

平成 18 年 10 月 1 日 発行

第 30 号

発行所

富山市梅沢町3丁目1-6

真宗大谷派 松寺永福寺

電 話 (076) 423-1848

発行人 長 関 寿



松寺だより



<画と文> 福光町東町 山村洋子さんの絵手紙から

次男・大寿親子お別れ会スナップ

昨年の11月5日午前11時30分から、別れを惜しむ多くのご門信徒のご参詣をいただき、悲しくも、かつ賑やかに別れの集いがもたれました。エレクトーンによる音楽法要形式の式典のあと、前住職の挨拶、そして大寿が感謝の挨拶、つづいて総代の松原信恭氏が代表して激励の言葉があり、ユニゾーン社長・梅田ひろ美様の乾杯で、和気藹々のムードのうちに別れの宴がもたれました。



▲お別れの言葉を表白



▲親子そろってご挨拶



▲松原信恭さんの激励の言葉を聞く



▲満堂のご参詣



▲辻政彦さんのお言葉を頂いて



▲田中良二さんの音頭で

ご 案 内

十一月四日・五日(土・日) 両日共 午前十時(午後なし)

報 恩 講 謹 修

住職継職式(新旧住職交替お披露目式)

(十時からの報恩講の後)

五日 午前十一時半より

法 話

(四日) 専徳寺住職 森 島 憲 秀 師
(五日) 当寺住職

ことしも聖人の教えを聞思し、悩み尽きない人生に、おかげさ
まの光りを仰いでまいりましょう。どなたもお誘い合わせ、ご参
詣下さいますようお願いしております。

平成十八年 十月

合 掌

表 白

この度 仏縁によって 私たち家族五人 住み慣れた故里の
松寺永福寺を離れ 婦中町長沢の西光寺へ養子縁組すること
になりました

顧みれば 昭和三十九年一月二十八日 第二十世住職釈間寿
を父とし 第二十世坊守悠子を母として この世に生をうけて
よりこのかた早くも年齢四十一年が過ぎました

その間 富山市立五番町小学校を経て 富山市南部中学校
富山県立西部高等学校を卒業の後 京都大谷大学文学部に入
学し 真宗大谷派の僧侶としての歩みを重ねてまいりました

現在 富山東別院の列座として また松寺永福寺の衆徒とし
て 法務に携わってまいりましたが いまだに未熟極まりなく
学浅く徳薄く 迷い多き人生を辿っています

まことに愚かな私ですが 幸いにも よき友 よき門信徒に
恵まれ かたじけなくも 今日までお育てをいただきました
その御恩は終生忘れることはできません

本日ここに 多くの皆様方のご臨席を賜り お別れ会を催し
ていただきましたこと 唯ただ忝なく 勿体なく存じます こ
の上は どこまでも親鸞聖人の門徒の一員として 本願念仏の

み教えを聞き聞きこの混迷する時代に 寺の存在意義を明らか
にすることが 暖かき皆様方のお心に お応えする道と存じま
す

願わくば この松寺永福寺ご一門に いやいよ輝かしい未来
が拓かれますよう 念じて止みません
平成十七年十一月五日

釈 大 寿 敬 っ て 白 す

平成13年お盆特別法話抄出

城端町大福寺住職 太田浩史師

なぜ松寺というのか(5)

◆一字拝領

松寺の開基「蓮真」という名は玄真周覚の「真」（とても大事な方ですが）、「蓮」は一字拝領とあって、当時の本願寺住職の一字をもらうわけです。一部例外はありますが、もらったのは一家衆という方がたに限られています。

一家衆には二種がありまして、「一門一家衆」と「北国一家衆」です。一門というのは蓮如の子供のことです。子供でも「如」をもらうのは跡継ぎに限られます。北国一家衆というのは第5代・綽如上人の子孫のことです。この松寺は一家衆です。

◆瑞泉寺の創立

当時の本願寺の規模は300坪そこそこで、猫の額のような土地です。そこに4間四方の小さいお堂が立っていた。訪れる人もいない。比叡山延暦寺の下寺のまた下寺とされていました。ということは浄土真宗の教えを説こうにも許してもらえない。なにしろ親鸞聖人の記憶がまだ生なましいわけです。かつて比叡山が訴えて流罪にした人です。したがって厳しい制約のもとにあった。そこで綽如上人は後を継がれたときに、祖父の覚如上人や伯父さんの存覚上人が北陸のほうに盛んに布教にいておられた、自分もその道を継いでなんとか北陸を目指そうと決意されていたようです。その機会がたちどころに現れまして、それは覚如上人がせっかく越前のほうでお弟子を指導されていたのが、いつしか秘事法門という危険な宗教になっていたの、越前へ出向いて徹底的に説き伏せたのです。そうしたご縁もあって瑞泉寺が創立されました。

◆蓮真の父母

それまで越前が教団の中心でしたが、戦乱を避けるために、加賀砂子坂に逃げてきた蓮真は高坂四郎左衛門に支えられて、教線を拡めました。

蓮如上人の腹違いの妹である如祐を母として蓮真が生まれました。上人の甥になります。父は綽如上人の孫である永存です。文明3年、蓮如上人は砂子坂にいた蓮真を訪れました。その彼を見て優れた人物であるということで、一字を与えました。

蓮真は蓮如上人亡きあと、それまでの門徒を長男・真桂と次男・実円にそれぞれ任せ、自分は三男・賢誓と共に、裸一貫になって、医王山の入り口にあった松寺すなわち皆往院に入るわけです。当時は、おそらく松寺照護寺とっていたようですが、のちに松寺永福寺になります。

あとがき

◆二頁にご紹介した大寿親子のお別れ会には八十名のお方が来て下さいました。厚く御礼申し上げます。待つていたかのように入寺先の西光寺住職が十一月十四日に亡くなり、息つく暇もない忙しさでした。◆また年末には長男・真寿夫妻が離婚の同意に至り、明けて正式に離婚届けを提出しました。こんなに悲しく、淋しい正月は今までありませんでした。別れた二人の未来に幸あれと念ずるばかりです。◆真夏日が二十四日間つづきました。毎年、世界的な規模で異常気象が加速しております。それというのにも幸せを願っての人の知の限界が露呈されているというべきか。もう後戻りは不可能なのでしょう。◆いよいよ「親鸞聖人七百五十回御遠忌法要」が平成二十三年春に京都東本願寺で勤まります。また富山の東別院では、平成二十年の五月に門首をお迎えして、「蓮如上人五百回御遠忌並びに親鸞聖人七百五十回御遠忌法要」が勤まります。それぞれ記念事業が計画され、それらに要する費用のご依頼（寺へは約四百六十万円）が参っております。年末にかけてご依頼をさせていただきたく、重ね重ね心苦しいかぎり存じます。が、暖かいご懇念をいただきますよう、よろしくお願ひ申し上げます。◆ご案内のように、十一月五日に住職交替のお披露目をいたします。旧住職ともども未熟です。どうかご指導ご鞭撻賜りますよう。（前任）